

編集室から

五輪の東京招致成功から「おもてなし」が流行っています。ですが、この言葉を漢字でどう書くか、ご存知の方は、残念ながら少ないと思います。

この言葉の由来は遙か飛鳥時代に遡ります。この言葉を顕した最も古い文献は、聖徳太子の十七条の憲法です。

曰く第一条冒頭「以和為貴：和を以って貴しと為す」。

現代では「わをもって、とおとしとなす」と読み方も誤っていますが、本来は「やわらぎをもって、たつとしとなす」です。

聖徳太子の「和（やわらぎ）」は、「喧々譁々の議論を経てなされた合意」を指しています。つまり数の論理や、声の大きい者の意見が通ってしまうこと、または「空気を読み」などと暗に付和雷同を強制する事などとは、全く別の次元で使われています。

太子は、民主主義の根幹ともいえる姿勢・意志決定過程こそが、最も重要であると、冒頭で宣言されています。ここには、現在の政治の実態レベルを超える理念・政治の大原則が籠められているのです。

つまり「おもてなし」の漢字表記は「以為」で、原義は「何かを以って、何かを為す」という意志・方針・戦略を示したもののなのです。

日本ほど清潔・安全でホスピタリティの高い国は無いと外国の方は言います。そんな中、「Omotenashi」が世界語になるのは喜ばしいですが、次回の東京五輪は「『何』を以って『何』を為す」ものなののでしょうか？

制定から1400年前経った今日、我々は果たして太子に胸を張れるのでしょうか？

語源を知れば、「おもてなし」が単なる接遇やホスピタリティの質を問うという小ぢんまりしたものではないことも判ってきます。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2013/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2013/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



彩の秋・食欲の季節
by hama

妻の父のことを岳父と呼ぶ。義理の父に対して威厳・尊敬を以って呼ぶ言葉である。語源は中国の故事。信仰の対象となつてゐる泰山の威厳・靈験と、その祭司・娘婿との逸話に基づいてゐるといふ。

九月初め、岳父が他界した。三年に及ぶ難病との闘いだつた。遺伝も伝染もしない神経の病で、真綿で首を絞めるかのように少しづつ体から自由を奪つていつた。

岳父は、若いときに父を亡くした。以来、長男として父に代わつて多くの妹を学ばせ、嫁がせた。

家族にも激しい感情の起伏を滅多に見せたことが無いほど、極めて穏やかな人だつた。子煩悩で、三人の孫の世話をマメにし、大いに可愛がつていた。

孫守が一段落してから唯一の趣味は旅行だつた。折込広告などから見つけ出し、一人で全国各地を回つていた。それも三年前を最後にプツリと途絶えた。

完全看護の病床に就いても、ほとんど愚痴らしい言葉を聞かなかつた。

今年の初夏以降、医師から何度も最終宣告を受けながらも、その度に乗り越えた。夏を越せるかどうか……という医師の言葉を尻目に、曆は夏を過ぎようとしていた。

今年の夏、能登は極めて少雨だつたが、稲刈時期に差し掛かつてから連日少なからぬ雨が続いた。稲刈りは、時期を失すると米の品質に影響する。休日と天候と、さらに父の容態を併せて時期を模索していた我が家は、ついに平日で、しかもやや早めの九月九日をその日と決めた。仕事を休める者は休み、近所の親戚も応援に来てくれた。

ほんやりしたのかも知れない。途中で左手薬指を稲刈鎌で刈つてしまった。掌がみるみる血で染まつていく。昼休憩、知人の開業医に駆け込んだ。稲刈鎌は鋸歯になつてゐる。このため、ダメージが大きいものの、午後からも作業があるので、敢えて縫わずに済ませた。

田んぼは一日がかりで終了したが、怪我といい何か予感があったのだから。一同病因に向かう。夕食は総菜屋の弁当を買い込んだ。

夜が更けてゆくに連れ、岳父の様子が変わつていつた。心電図の触れ幅が急速に小さくなり始めていた。計測機器も脈が取れずにエラー表示を繰り返して始めた。金沢で病院勤務中の義妹が呼ばれる。都合で到着は、日付をまたいだ未明になるという。一旦帰宅していた娘もやつてきた。

心電図の波形と、時計を交互ににらむ。病人はそつちじゃないよと、お互いに声を掛けながら父を見守つていた。勤務を果たして妹は午前一時頃に着いた。

「おとうさん」彼女が呼びかけるのと、波形が平らになるのが同時だつた。

こうして岳父は、稲刈りを終えるのを見守り、三代の女性たちに見守られて旅立つた。

人はみな、安らかに旅立ちたいと願う。しかし、自分の死様は選べない。にも関わらず、こうして自身の人生を物語るような旅立ち方ができた岳父は幸せたと思ふ。

仏陀は、往生を遂げる直前まで、真理を説き続けた。キリストは、磔になつても、隣で磔られた盗賊を導いた。

偉人に限らず逝く人は皆、その姿で残る者に人生を教えて行くのかも知れない。

岳父の倅となつたのは、丁度三十年前の夏だつた。思えば殆ど孝行らしい事して来なかつた。今生の際で、後悔しても遅い。やるべきことを遂げられなかつたという念だけは残したくない。

親の世代から、手渡されたバトン。それをつながなくてはならない。自分の世代で何を成し、次の世代へと手渡すか……

自分の次に続く世代をみると、子・孫・ひ孫・玄孫と続き、その先は子孫である。

自分から先の世代を眺めると、親・祖父母・曾祖父母……となり先祖になる。その先は、祖先である。

子や孫として生まれた自分は、親・祖父母となるだけは済まない。人は死ぬと、先祖になり、祖先へと途切れることなくつながっていく。

インディアン酋長アセネカは、それを端的に示す言葉を残している。

曰く「大地は、先祖から譲り受けたものではなく、子孫から預かつてゐるものだ」

先の世代から手渡されたバトンは、子孫つまり次の世代からの預かり物だと知れば、どのようにつないでゆけばよいか、自ずから見えてくるのだから。

ある出来事をきっかけに、叶うのは願ひではなく、思ひであることに気付いた。願ひとは、意識で設定すること。思ひとは無意識にあること。意識が四％に対して、無意識は九十六％を占めてゐるといふ。これでは願ひが思ひに勝るはずは無い。

だとすると、使命という道も、無意識の中に思い描かれてゐるのかも知れない。

数年前から、臆気ながら自らの使命に気付き始めた。その頃は未だ多少疑心暗鬼だつた。

ところがここ数ヶ月の間に、突如としてより明確になり、道が啓け始めている。意図せずして思わぬ人と出逢ひ、それまで見知らぬ世界が拡がり、聞きたいとは思わぬのにメッセージが届く。

こうなつてくると、もう疑う余地は無い。

岳父に対して、義理の母の尊称は丈母である。そして、実の父母は有難い事に健在である。どんな孝行ができるのか。

道は、続いている。生きるものは歩まねばならぬ。

きただより60 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『きただより10年を迎えて / 過熱する世界遺産国内推薦』

きただよりは、お陰様で60回目となりました。隔月執筆なのでなんと10年が経過したことになります。読んで頂いている皆様には、感謝申し上げます。これまでの59回を振り返ってみると、分野別では、まちづくり17、観光11、交通9、スポーツ4など、地域別では、青森県21、秋田県9、山形県と東北が各4、岩手県3などとなっております。私自身10年のささやかな記録にもなりました。毎回、皆様とうまく伝わっているのでしょうか。今後ともよろしくお願いたします。

さて、今回は「過熱する世界遺産国内推薦」と題し述べてみたい。きただより第3回(本ニュース36号:2003年12月)では「白神山地 世界遺産登録から10年」を執筆している。そのなかで『今後、世界自然遺産に北海道の知床がユネスコに申請され、小笠原諸島、南西諸島と続くようである。文化遺産も同様であるが、「我が県にこれがありますよ」という誘致合戦にも見えなくない。』と書いた。あれから10年が経ち今年世界遺産登録20年となり、青森県と秋田県の状況を見ると、様々な問題点は抱えているものの、登録後数年のブームからは落ち着いてきた感がある。

しかし、世界遺産登録に向けた国内推薦の活動は、ますます過熱してきている状況である。あまりにも世界遺産が増え現在、161ヶ国、981件に上る。ユネスコに一国が推薦できる遺産候補は年1件とされ、その枠を巡って激しい招致合戦が行われている。

1つの政府推薦枠を、今回から導入された内閣府推薦として「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」、文部科学省推薦(文化庁)の「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」で競い、予想通り、岩手県から鹿児島県までという広域連携と政治力も勝っている前者が推薦されることになった。これまで文化庁の推薦でOKであったものが突然の仕様変更である。最初から無理のある決め方で結果が目に見えていたが、これを契機に文化庁の推薦がないがしろになる危険性と危機感がある。文化庁推薦をとりつけるため、関係自治体の何年にもわたる準備活動が泡となり、膨大な時間、お金、労力が結果的に無駄になってしまった。「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」は、今回、文化庁の段階で推薦が見送られた。これは青森県の前知事が2000年代前半「三内丸山遺跡を世界遺産に」に端を発し、近隣の3道県に呼びかけ、2009年に世界遺産暫定リスト入りし今日まで招致活動が続けられてきているが、「なぜ縄文遺跡を北海道・北東北に限定するのか」という疑問が払拭できず、突きつけられた最大の課題である。世界遺産暫定リストに記載されている地域は、どこも先が見通せない競争にさらされてしまっている。

新たな世界遺産を誕生させることは、これまでにない、新たな視点にたち文化・自然資源の再評価や広域的な文化のつながりを国民に広めるという意義が認められる。しかし、なぜ、その価値があると考えられる資源に世界遺産という称号が本当に必要なのか否か、さらに膨大な招致エネルギーを費やすことなどを、再考すべき段階にきているのではないか。

『娘への手紙』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

これまでとは全く違ったテイストのタイトルになってしまいました。9/29で三歳になるうちの娘『川島一葉』は、どんどん言葉を覚え、従来の強気・生意気な性格も乗じてか大人でも言い負かしてしまうようになり、無事(?)すくすくと成長しております。ただ、父親離れを見せることもあり、父親には少しばかり寂しくも。

そんな娘に三歳の誕生日を迎えるこの機にメッセージを残せればと思い、誠に勝手ながらこの場を借りて筆ならぬキーボードをたたいた次第です。

君の困ったところは、

- ・いつもやたら声がかすぎるところ。
祖父母相手でももう少し小さくても聞こえていると思うよ
 - ・自己中心的で、常に自分を正当化しようというところ。
いじめられないか父は心配です
 - ・お調子者で輪の中心にいないと不機嫌になるところ。
持ちネタが少ないからそこまでのエンターテイナーではありません
 - ・お菓子や洋服など気に入ったらそれしか着ないところ。
飽きたら大量の不良在庫だ。
 - ・綺麗なお姉さんには愛想がよく、そうではない人に近づきもしないこと。
その後の親の対応も考えてください。
- でも大好きなところは
- ・とにかくその豪快な笑い声は元気になります
 - ・自分がこうと決めたら意地でもやり遂げようとするその執着心と集中力には感心します
 - ・誰かが喜ぶ事が大好きで、そのためならどんな労力も厭わないところ
 - ・自分なりのスタイルというか、こだわりが強いよね
 - ・まあ、自分なりの美的センスがきちんとあるということにしよう。。。。
そう君の嫌いなところと好きなところは表裏一体なんだよね。
状況や人によってどう捉えられるかという事なんだ。
- これからもう少し大きくなって、子供の世界にも確執、嫉妬、欺瞞などが生まれてくるわけだけど、そんなものは常に豪快に笑い飛ばして、『正義のヒーロー』になってほしいなあ。
- 父ちゃんもウルトラマンになりたかったしね。
偉そうに言ってますが父も40歳を過ぎてもまだまだ大人になれない半人前です。
これからも一緒に成長していきましょうね。

なんていうんでしょうか、これは『ラブレター』なんですね。恥ずかしいですが、娘に対する愛情がとめどなくて、どうぞお許してください。
最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

~ 英国の旅 ~ 静岡県職員 溝口 久

ロンドン3日目、かねてからビッグ観覧車「ロンドン アイ」に乗ってみたいと思っていた。観覧車には思い出がある。2004年に開催した浜名湖花博の会場の計画の時の話だ。当時1998年、今は亡き森下慶子さん(㈱ケーピー代表)らのプロデューサー会議で会場の在り方が話されていた。当時、よく博覧会会場には上から会場一望できる観覧車が据え付け



られていた。眺望を楽しめるばかりでなく、主催者側に好都合なのはお客の回転がいいから何より儲かるということからだ。でも、鉄骨が放射状に広がった鉄のリングに籠がぶらぶらとぶる下がっている姿が“ぶっしょたい”と言われ実現しなかった。“ぶっしょたい”とは、無精の体から見苦しいとの意味で使うこちらの方言。この言葉を由布院観光協会の理事会で口にした時に皆怪訝そうな顔をした時に方言であること気づいた。

花博会場を東西に分ける水路の上に架けたらいいなと個人的には思っていたので残念だった。代わりに展望塔をつくることになった。これは当初の計画の展望台から一気に高さ50m、浜名湖を一望できる展望塔にもの勢いで変えてしまった。浜名湖花博推進室から異動後、「何で50mにしたのか？」って聞かれたので、「浜名湖に都田川の水が注ぐ上流域から、遠州灘と湖水の呼吸をしている今切口まで一望するには50mの高さが必要なんだ、そうでなければ価値がない」と今更何を言うかの気分で答えた。でもエレベーターで上がるしかないからお客のはげが悪く大行列になっていた。高さの変化が楽しめる観覧車もいいが、博覧会会場の跡地「浜名湖ガーデンパーク」に残る今となっては空いている展望塔も相当にいい。外が見えないエレベーターで上昇後、扉が開き目の前に広がる浜名湖を見ると誰もが「おー！」と思わず声が出る。一度是非ご体験あれ。

話を浜名湖からロンドンに戻す。

ビッグ観覧車「ロンドン アイ」はビッグベンのテムズ川をはさんだ位置に、90年代末のミレニアムプロジェクトで建設され2000年に開業した。高さは135mと竣工時点では世界最大だったが、その後シンガポールにできた高さ150mの観覧車に首位を譲っている。

「ロンドン アイ」はこれまで目にしてきた観覧車と違い、ホイールと中心軸を繋ぐ部材がケーブルで、自転車のスポークのような構造になっている。ホイール本体をテムズ川の上空に浮かすようにするため、倒れやしない

かと思うぐらいに支柱を斜めにしている。日本ではやかましい河川法があって到底無理な芸当かと思う。

ゴンドラはホイールの外側に付けられガラス張りなので、頂点に到達すると360度視界を遮るもの無くロンドンを一望できる。

ゴンドラの定員は25人で、乗り合わせたのは中国人のようだった。チケットを買ってから観覧車に乗るまで1時間かなり混んでいる。土日ではなかったけど世界から観光客が集まって来るってこういうことかぁ。13年も経っているのに色褪せない。

ふと、大分県九重の大吊り橋のことが頭をよぎる。2006年10月30日に開通した高さ173m、長さ390mで、歩行者専用橋としては日本一の高さで長さである。橋からは、滝や、紅葉の美しい九酔溪の雄大な景色を望むことができる。総事業費20億円、小さな町でこれを建設するには相当な度胸、説得が必要だったことは容易に想像できる。ふたを開けたところ入場者は、開通9日後に10万人を超え、開通からわずか24日後に年間目標の30万人を達成した。その後、翌2007年4月に100万人、2008年4月に300万人を達成。入場料500円/人の収入により、7億3000万円の地域再生事業債は、予定より8年早く返済した。2010年11月8日、入場者数が600万人を突破今年7月2日は777万人を突破したのである。おかげで周辺の温泉地の黒川も由布院も大いに潤ったのである。

では、このロンドンアイどうだろう。2000年3月開業し2002年7月で850万人、しかも料金18ポンド/人。がっちりマンディどこではないではない。

ロンドンアイに乗って一周するのが30分、終わりが近づく頃、フレームに取り付けられたカメラが外から我々を撮ってくれる。もちろん降車後には売店で販売しているもうかりの仕掛けになっている。

料金は3000円弱だったが、長女がネットで割引券をゲットしてくれたので半額ぐらいだったと記憶している。ロンドンに行った際には是非どうぞ。

